

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第 59 号 2006. 9. 22

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2
-16
佐光伸一
電話・FAX 011-727-1520

灰谷慶三先生のご逝去を悼む

安藤 厚

ポー文協会長・灰谷慶三先生は、去る七月六日、急性肺炎のため札幌市内の病院で永眠されました。享年六十九歳でした。

灰谷先生は、初代会長（一九八七～一九四）今村成和先生、副会長遠藤道子先生、事務局長吉田宏先生らとともに一九八七年一〇月の北海道ポーランド文化協会設立に尽力され、第二代会長（二〇〇二～二〇〇三）谷本一之先生のおとをうけて、第三代会長としてポー文協の発展に貢献されました。

灰谷先生は一九三六年一〇月一〇日函館市に生まれ、北海道大学文学部、早稲田大学大学院で学ばれ、東京大学教養学部助手を経て、一九七〇～二〇〇〇年まで北大文学部助教授、教授としてロシア文学の教育・研究に専心されました。

ご専門は十九世紀のロシア文学でしたが、一九七九～八〇年にワルシャワ大学日本学科で教えられて以来このほかポーランドを愛され、制約の多い時代に十人以上のポーランド人留学生を北大に招き、親身の世話をされました。

また、北海道大学放送講座「文明の十字路—東欧」（一九九二）では「ポーランドの文学」を担当され、定年後も北大の全学教育・一般教育演習（フレッシュマンセミナー）で「東ヨーロッパの社会と文化」を担当され、ポーランド文化の紹介に努められました。

灰谷先生がお世話をされた留学生は、スワボミル・シユルツさん（一九七七～八一年北大文学研究科日本史学専攻に留学、現在ワルシャワ大学日本学科教授）をはじめ、世界中で活躍しておられます。ポー文協創立十五周年記念誌 P O L E (二〇〇三)には、小見アンナさん、ワタさん夫妻、アンナ・ボーリエクさん、アレクサン德拉・モクシンスカさんら、お世話になった留学生の寄稿が数多く掲載されています。

ポー文協の創立後はその活動を通じてポーランドとの文化交流に尽力され、一九八九～二〇〇〇年まで全三十期にわたったポーランド語講習会の運営には、奥様の洋子さんとともに特に心を砕かれました。

灰谷先生との親交が縁で、一九九二年五月にはヘンリック・リップシツツ大使、二〇〇〇年三月にはワルシャワ在住のジャーナリスト松本照男さんを札幌にお迎えすることができました。

私自身も灰谷先生のお誘いでポー文協に加わり、一九九四～九五年にはワルシャワ大学日本学科で教える機会を得ました。

創立十五周年記念誌の発行は、灰谷会長の下での最初の大きな仕事でした。その後ポー文協は、来年の創立二十周年を前にして、灰谷

会長、佐光伸一事務局長の努力で、若い世代を中心に新たな活動を模索しているところでした。

本年三月、小笠原正明第二代会務局長・現副会長が東京に移られることになり、灰谷会長から「送別会を」とのご提案があったのですが、時機を逸し、「夏には是非」と話していたところ、思いもかけずこのようなかたちで機会を失い、残念でなりません。

灰谷慶三先生の長年のポー文協へのご貢献に感謝し、あまりにも早いご逝去を悼み、心からご冥福をお祈り申し上げます。



2004-2005年度懇親会にて

近ごろ話題の(?) ポーランド
三浦 洋

二〇〇五年は、ポーランドの話題が日本の新聞に比較的多く掲載された年でした。四月にはポーランド出身のローマ法王ヨハネ・パウロ二世(本名カロル・ウォイテイワ)が逝去、十月には国際シヨパンコンクールで日本人二人が並んで四位入賞。同じく十月にワルシャワ市長レフ・カチンスキ氏の大統領当選と、国際的に注目を集める出来事があつたからでしょう。「連帯」運動や東欧改革が報道された一九八〇年代ほどではないにしても、ポーランドが久々に世界の関心を惹きつけたことは特筆されます。そんな話題を振り返ってみます。

ヨハネ・パウロ二世が逝去
四月二日、第二百六十四代ローマ法王、ヨハネ・パウロ二世が長い闘病の末、八十六歳で亡くなりました。臨終の場には、私設秘書を長年つとめたスタニスワフ・ジービシユ大司教らポーランド人聖職者も数人立ち会つたとのこと。在位二十六年余の間に百三十カ国以上を訪問し、たくさんの言語をあやつつた法王でしたが、生涯の最期までポーランド人としてポーランド語を使いつづけた人でもありません。二〇〇三年にクラクフで刊行された「ローマ三部作」(邦訳は聖母文庫刊)には、



ヨハネ・パウロ二世とミウオシユ

法王が宗教的思索をめぐらせた詩がポーランド語でつづられていきます。
「森の木々が波となつて／リズムミカルな音をたて／せせらぎを流れくぐる。／このリズムはあなたを啓示し／永遠の御言葉を啓示する」

冒頭の一節ですが、自然の律動の中に宗教的な啓示を見出す自由な感性が感じられます。この新鮮でみずみずしい感覚こそ、カトリック教会と他宗派との対話を進めた法王の内面にみちていたものかもしれません。

法王がポーランドの自主管理労働組合「連帯」を支持したことは

よく知られていますが、対外的にも、ソ連大統領だったゴルバチョフ氏と会談(一九八九年)、往時の教会が審問したガリレオに謝罪(一九九二年)、ダーウインの進化論を一定程度肯定(一九九六年)、パレスチナ自治区を訪問してPLO議長のアラファト氏と対話(二〇〇〇年)、というように科学と政治を含む人類史の多局面に巨大な足跡を残しました。それは、若き日に演劇や詩吟に没頭した青年カロル・ウォイテイワの情熱を持ち続けていたからにちがいありません。聖職者の枠を超えるような活動を精力的に繰り広げたのも、受難の歴史を持つポーランドの出身であればこそでしょう。イタリア人以外の法王は四百五十五年ぶりということで即位当時に話題を呼びましたが、法王としての実質的な活動にポーランド人らしさがよく表れたともいえます。法王逝去のニュースを、ポーランドではアナウンサーたちが涙ながらに伝えたそうです。

レムとミウオシユ

法王になつたヴォイテイワはクラクフに近いバドヴィツェの生まれですが、歴史あるクラクフは文化人の宝庫。つい最近も、クラクフで亡くなつたSF作家がいます。今年三月二十七日、八十四歳で逝去したスタニスワフ・レムです。レムの作品には邦訳がいくつもあります。中でも、かつてソ



スタニスワフ・レム

連の映画監督アンドレイ・タルコフスキーによって映画化された「ソラリスの陽のもとで」(映画の題名は「惑星ソラリス」)はとくに有名です。原作者のレムと、映画化にあたってSF色を取り去ろうとしたタルコフスキーは激しく対立したといいますが、二〇〇二年になつて米国の映画監督スティーブン・ソーダーバーグが原作に忠実な映画を製作しましたので、レムとしては満足だったかもしれません。

そして、二〇〇四年にもクラクフで亡くなつた詩人がいました。ヴィスワヴァ・シンボルスカに先立つてノーベル文学賞を受賞したチェスワフ・ミウオシユです。年齢は少し違いますが、ミウオシユの生涯は法王と共通する面がある

り、第二次世界大戦中に地下出版活動を行ったほか、後年は米国で暮らしつつ「連帯」運動を支持しました。一九八〇年のノーベル文学賞受賞は「連帯」運動の高まりと時期を同じくしており、「連帯」のリーダーであったレフ・ワレサが一九八三年にノーベル平和賞を受ける伏線になって見えます。

ノーベル平和賞というと、ワルシャワ出身で世界平和に貢献した人物が二〇〇五年八月三十一日に逝去しました。核兵器廃絶を目指すバグウォットシユ会議を創設したジヨゼフ・ロートブラット氏です。かつてポーランド自由大学の原子物理研究所副所長をつとめ、ナチスドイツに抗するため一時は米国の原爆開発に協力したものの、広島と長崎の悲劇に衝撃を受けて反核運動に転じました。一九九五年にノーベル平和賞を受賞するにいたったのも、世界全体の平和を考える姿勢が氏の中で貫かれていたからでしょう。

今挙げた四人の生誕年は、ローゼンブラットが一九〇八年、ミウオシユが一九一一年、ローマ法王となったヴォイテイワが一九二〇年、レムが一九二一年。第一次大戦後、ポーランドが独立を回復した一九一八年に近い生まれの偉人たちが相次いで世を去ったことになりす。彼らが二十世紀の世界史に名を残す人物になったのも、世界大戦と東西冷戦によって

時代の傷跡を被ったポーランドの出身なればこそです。

そして、昨年ポーランド大統領に当選したレフ・カチンスキと、その双子の兄で政党党首をつとめるヤロスワフ・カチンスキは戦後の生まれ。大戦を経験していない世代へのバトンタッチともいえるでしょう。かつてワレサが社会主義終焉後の大統領に就任したとき、伝説のポーランド建国の祖レフにちなんで「レフからレフへ」とマスコミは書きましたが、三人目のレフがリーダーになったわけ

コペルニクスの話題も

古い時代の偉人に関しても昨年、一つの話題がありました。八月にポーランド北部フロムボルクの大聖堂で、十五、十六世紀の天文学者コペルニクスの遺体が見つかったと報じられたのです。コペルニクスの没年は一五四三年ですから、実に四百六十二年ぶりのこ

コペルニクス



とです。歴史上しばしばドイツがポーランド人を蔑視して「コペルニクスはドイツ人」と喧伝してきた天文学者の素性がいつそう明らかになるかもしれません。そういえば、ベルリンを訪れた十八歳のシヨパンはドイツ人からそういうことを言われて、「(コペルニクスの生誕地トルンが現在ドイツ領であるがゆえに)コペルニクスがドイツ人ということになるなら、イエス・キリストはトルコ人と考えねばならなくなります」と、機知に富んだ反論をしました。そのシヨパンは一八一〇年生まれ。

次回二〇一〇年のシヨパン国際コンクールはシヨパン生誕二百周年の節目に当たっていますので、きつと盛大に開催されることでしょう。シヨパンのファンとしては今から楽しみです。

連載エッセイ
ポーランドの道産子 第3回
エデネー夕・ジエプカ

「妊娠したと区役所に届け出ないといけませんよ」と言われるのをわたしは耳にしました。「わたしはですか？」と驚きました。「はい、奥さんか、奥さんのダンナさんがです」。日本では個人的に役所に行き、役所のひとの前に立って「こんにちは、わたし妊娠しています」などと告げるとはまったく知りませんでした。ポーランドではお医者さんが「妊娠カード」なるものを作り、わたしの知る限り妊娠した女性はそのカードに関し何もしなくてもいいのです。お医者さんでさえ妊娠の事実をどこにも知らせることはしないのです。しかし行く必要があるというので、行って来ました。区役所では「母子手帳」と妊娠の経過についてのいろいろなおアドバイスの書いた小冊子を貰い、およそ二ヶ月間の「母親教室」へと招待されました。授業は退屈な講義などではなく、遊びやコンクールや体操、食事のアドバイスなどがありました。ある授業ではパパたちも招待されて、赤ん坊代わりの人形と一緒に風呂に入浴させることを学びました。一度、人形が浴槽の底に沈み始めたときには、主人と一緒に肝を冷やしました。この出来事のせいで緊張したあまり、この時以来、赤ん坊をはじめお風呂に入れるのは出産

そのものよりも難しいのでは、と思いついてしまっただけです。もっと楽しい出来事の中で覚えていた授業は、「先輩ママ」が自分の小さな赤ちゃんを連れて来てくれて、その子を手やひざに抱いて、抱き寄せることが出来たときでした。その時、わたしももうすぐ自分の子供とこんな集まりにやってくるのだと思ひ、その瞬間を待ちきれない思いでした。でもおなかには私が望んだようには早く大きくはなりません。子供を待ち受けているように長い間見えず、それに加え気分もとてもよかつたので、日本語の授業に通ったり、知り合いに会ったりしていました。毎月定期検診のためにお医者さんのもとにも出かけました。この訪問がわたしは大好きでした。というのも毎回、超音波検査で私たちの息子を見るのが出来るからです。ここにも日本とポーランドの新しい違いがありました。ポーランドでは多くの他のヨーロッパ諸国と同様に定期検診は妊娠期間中全体にわたって一回しかありません。それは子供の安全を考慮してのことだそうです。本当にそうなのでしようか？私には分からないので、これ以上深くこの問題には立ち入らないことにします。ただ日本の女性はこのなにも何度も超音波検査を受けているけど子供は健康に生まれているし、私の子供にも害はないんだと自分を納得させました。それに

加えわたしたちの病院にはその当時札幌では一番いい超音波検査の機器がありました。いわゆる三次元(3D)システムです。これは自分の子供を見る楽しみをさらに倍増させてくれました。今でもこの写真は思い出にとつてあります。しかし残念ながらこの楽しみは妊娠の最後の瞬間までは続きませんでした。出産の二ヶ月前に痛みが表れ、ベッドに横になることを余儀なくされたからです。病院で点滴を受けながら三日過ごし、病院を出るときお医者さんは、家で「全く」何もしないことを条件にのみ、家に帰ってもいいと言いました。それはとてもつらい時期でした。とりわけわたしの主人にとつてはそうでした。というのも彼は学問と翻訳以外にも掃除や洗濯、料理つまり家の全ての仕事をしなければならぬのです。出産の二週間前に彼のお母さんが来てくれてようやく、胸のつかえがとれま

した。これでわたしもホッとしました。新しい家族のメンバーを迎える準備がまだすべては整っていません。義理の母はすべての仕事を引き受けてくれ、わたしは安心して「その瞬間」を待ちわびることが出来ました。このようにしてわたしはある朝、強い痙攣を感じました。主人を起こし、口には微笑みを浮かべていましたが、軽い恐怖の念とともにこう言いました。「始まったわ！」

つづく…



2004-05年度会計決算書 (自2004年10月1日～至2005年9月30日)

【収入の部】	予 算	収支・支出済み	内 訳	単位：円
会 費	300 000	177 390	全額の47% (会計年度終了後53380円の納入、実際は61%)	
その他	0	0	銀行利息、寄付	
小 計	300 000	177 390		
繰越金	194 464	194 464		
合 計	494 464	371 854		
【支出の部】				
事業費	130 000	106 583	例会:64560 総会:42023	
連絡費	50 000	12 900	ポーレ発送, はがき・切手他	
編集費	8 000	0	ポーレ制作費, 原稿料他	
会合費	30 000	5 500	運営委員会他	
事務費	100 000	11 760	ポーレ発送人件費、資料コピー代など	
予備費	20 000	24 150	封筒	
小 計	338 000	160 893		
繰越金	156 464	210 961	銀行預金:495 郵便局:184000 現金:26466	
合 計	494 464	371 854		

2005-06年度会計予算 (案)

【収入の部】	前年度決算	予 算	内 訳	単位：円
会 費	177 390	250 000	全額の47% (会計年度終了後53380円の納入、実際は61%)	
その他	0	0	銀行利息、寄付	
小 計	177 390	250 000		
繰越金	194 464	210 961		
合 計	371 854	460 961		
【支出の部】				
事業費	106 583	100 000	例会、総会等	
連絡費	12 900	60 000	ポーレ発送, はがき・切手他	
編集費	0	8 000	ポーレ制作費, 原稿料他	
会合費	5 500	10 000	運営委員会他	
事務費	11 760	120 000	人件費	
予備費	24 150	20 000	封筒	
小 計	160 893	318 000		
繰越金	210 961	0		
合 計	371 854	318 000		

本年度の総会及び懇親会
2005年12月2日、かでの
2・7(中央区北2条西7丁目)
にて本年度の総会および懇親会が
行われました。

総会

会長挨拶：灰谷慶三

1. 2004・2005年度事業

および決算報告、監査報告

2. 2005・2006年度事業

計画(案)と予算(案)

3. 2004・2005年度役員

(案)について

4. その他

懇親会

開会挨拶と乾杯

会食

閉会の挨拶

乾杯-Sto Lat

司会：鳴神雅史

1. 2004・2005年度の事業報告および決算報告

《主催事業》

(1) 第49回例会：ポーランド

映画上映会「クシシュトフ・キエ

シロフスキ監督「ふたりのベロニ

カ」2005年 4月22日

かでの2・7 (参加者約20

名)

(2) 第50回例会 ポーランド

料理講習会—講師: Edyta Rzepka

2005年7月11日 札幌市男

女共同参画センター調理実習室

(参加者約30名)

《2004・2005年度決算報

告》【別紙参照】

2. 2004・2005年度の事業
計画(案)および予算(案)

《主催事業》

2月：《ポーランド料理講習会》

(デザート篇) 講師：Edyta Rzepka

先生

5月：ピアノコンサート

《後援事業》

音楽会、展覧会、映画会、講演会

などを適宜行う

《その他》

会誌「ポーレ」発行(2回)

総会：2006年10月ごろ

運営委員会：2回程度

《2005・2006年度予算

(案)》【別紙参照】をご覧下さ

い。

3. 2005・2006年度役員(一

年任期)(案)について

顧問：谷本一之・遠藤 道子

会長：灰谷 慶三

副会長：小笠原 正明

運営委員：安藤 厚・薄井 豊美・小笠

原 正明・越野 剛・小林 美保・佐光

伸一・霜田 千代麿・中島 洋・鳴神

雅史・三浦 洋・渡辺 卓・Rafal

Rzepka

ポーレ編集委員：小林 美保・佐光 伸

一・三浦 洋

監査委員：富山 信夫・吉野 悦雄

事務局長：佐光 伸一

会費の納入はお済みですか？

(2005年10月～2006年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。
上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

《会費振込銀行口座》

北洋銀行 大通支店

(普) 301-0605084

北海道ポーランド文化協会

事務局長佐光伸一

《郵便振替口座》

02740 - 5 - 19735

北海道ポーランド文化協会

普通会員(年額) 3,000円

維持会員(年額1口) 5,000円

学生会員(年額) 1,500円

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・小林 美保・

佐光 伸一・三浦 洋

Tel/Fax 011-727-1520

(連絡先) 佐光

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 59 号 (2006 年 9 月)

目 次

安藤厚「[第三代会長] 灰谷慶三先生のご逝去を悼む」	1
三浦洋「近ごろ話題の(?) ポーランド」	2
エディータ・ジェプカ「ポーランドの道産子(3)」	4
[第 19 回 2005-2006 年度] 総会及び懇親会報告 [2005.12.2]	5